

---

# 二つの夜

エバンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一つの夜

### 【著者名】

エバンス

N6335F

### 【作者名】

あらすじ

父と娘の会話。娘に映る何気ない感情にて、僕は揺さぶられる。この子は何者なのだろう。

## 一いつの夜

月の呼吸の音さえ聞こえそうな程の、静かな夜。僕はリビングのテーブルに座り、コーヒーを飲んでいた。時計が針を進める音だけが、辺りに響いていた。僕は何を思うわけでもなく、瞳を閉じたり、手を見つめたりしていた。

人の気配がして後ろを振り返ると、七歳になる娘が立っていた。暗闇の中、薄紅色のパジャマだけが浮かび上がっていた。僕は何故か、娘は僕の命を奪いに来たのかもしれない、という錯覚に襲われた。冷たい汗が、背中を伝った。僕は娘を恐ろしく思つてしまつた。自分の思いを吹き飛ばすために、強い声で言つた。

「どうしたんだ、眠れないのか。」

「うん。」娘は不安そうに言つた。僕に怒られるんじゃないかと心配しているのだ。

幸いな事に、明日は日曜日で僕の仕事も休みなので、娘を横に座らせ、すこしお喋りをする事にした。それに、さつき僕が感じた不吉な思いは間違いで、僕は娘を愛しているんだという事を確認したかった。

「お客様、ご注文は何にいたしましょうか。」僕はもつともらしく言つた。

「じゃあ、ホットミルクをお願い。」彼女は気取つて言つて見せたが、くすくすという笑いがもれていた。

「駄目じゃないか、笑つたら。」

「だつてパパの言い方がおかしいんだもん。」

父娘間の他愛もない遊びだ。ままごとの延長のよつなもので、どちらかが勝手に役を決めたら、それにしたがわなければならぬという遊びで、娘が考えた。妻と別れてから、この手の遊びでよく娘

と触れ合つようにしている。

ホットミルクを飲み、一段落したところで娘が言った。

「ねえ、パパ、お話してよ。いつもやつてるやつ。」

「ああ、良いよ。で、どんな話が良いのかな。」

「うーんとね、パパの子供の頃の話が聞きたい。」

「子供の頃かー。ちょっと待てよ、今、思い出すからな。」と言  
いながら、僕は最初の一文を考えた。ここでいう話とは実際にあつ  
た話ではなく、即興の考える作り話だ。娘もその事が分かっていて、  
どうにかして僕を困らせようと、あれこれ質問してくる。僕はその  
質問に答えながら、物語の細部を固めていくのだ。この話の中で、  
僕は、海底の秘宝を求める海賊にも、木星到着を果たした宇宙飛行  
士にも、空に存在する王国の王子にも、なつたりした。

「僕には子供の頃。親友がいた。」いつもよりは単純だが、たま  
にはこいつの良いかもしない。

「パパの親友はどんな子供だったの？」

「あらゆる面で、僕とは正反対だったよ。僕はその頃、内氣で、  
おとなしくて、本ばかり読んでた。でも、彼は活発でいつも外  
を駆けまわってたな。」

「どうして、そんな二人が友達になつたのかしら。」

「それが僕にも分かんないんだ。気付いた時には、いつも一緒に  
いたつて感じかな。」

「恋人はいた？」

「えつ。」僕は聞き返した。

「その一人に恋人はいたの？」と娘は言った。もうそんな事に興  
味があるのか、と僕は少々驚いた。

「彼にはいた、つまり、僕には居なかつたつてことになるな。で  
も、実を言つと僕も彼の恋人の事が好きだつたんだけどね。」

「じゃあ、なんでその事を彼の恋人に言わなかつたのよ。」と娘  
は怒つたように言つた。

「だってその頃、僕らは小学生だぜ。そんな大げさなもんじゃな

いよ。それに彼は僕の親友だつたしさ。彼なら彼女にぴったりだ、なんて子供心に思つたんだよ。」

「訳わからんない。」と娘はふてくされたように言つた。その表情が驚くほど別れた妻に似ていたので、僕は焦つた。別れる直前はいつもこんな顔してたつて。

娘が気に入つてくれそうに無かつたので、話の展開を変えることにした。

「でも、ある日、そんな三人に事件がおきる。どんな事件だと思つ?」

話の続きが浮かばない時は、娘に聞いてみる。大人の頭ではまず浮かばないだらう事を言つてくれるので、楽しい。

もある。

「その女の子が転校しちやつた?」

「違うよ。」

「じゃあ、その女の子の気が変わつちやつたんだ。」

「違うな。」

「じゃあ、分かんないよ。教えて。」

「僕の親友は殺されたんだ。」言つてからしまつた、と思つた。人が殺される話なんて、七歳の娘にする話じやない。

「誰に、何で、殺されたの?」娘は驚くこともせず、質問してきました。そんな娘に僕が戸惑つてしまつた。

えーとな。と言いながら僕は立ち上がり、腕時計を見た。

「もう遅いし、続きを明日にしないか。」今なら、まだ、修正は効く。最後に親友が行き返「うーん。」とうなりながら、娘は頭をひねつてゐる。この時間が僕の考える時間に事にすれば、大丈夫だ。

娘が僕の服を掴んで、座らせようとする。

「続きを話して。」娘の目は今までに見た事がないくらい、真剣だつた。

辺りの暗闇が濃くなつていいくような気がした。僕は座つて、コー

ヒーを口に含んだ。「コーヒーはもう、冷めていた。

「誘拐されたんだ。彼の家はお金持ちだつたからね。」

「それで、どうなつたの?」するりと娘が聞いてきた。誘拐の意味を知つていたのだろう。

「犯人側の要求は二つだつた。一つはお金を用意する事。もう一つは警察に通報しない事。この二つを守れば子供は無事に帰す、と約束した。逆を言えば、この二つの事が守られなければ……。」

「子供は殺されるつて事ね。」娘が引き継いで言つた。娘の口から「殺される」なんて言葉が発せられた事に僕は恐怖を感じた。娘は本当に僕の命を奪いに来たのかも知れない。喉がからからに渴いていた。「コーヒーを飲んでも、その渴きは満たされる事が無かつた。

「それで結局は子供は死んじゃつたんでしょ。」

「ああ、彼の両親は約束を守つた。でも、犯人は約束を守らなかつた。犯人が子供を帰したと言つた場所には、彼の死体があつた。」

「悲しかつた、彼が死んだと知つた時?」

「もちろんつて言つても、最初は彼が死んだなんて信じられなかつた。彼女が彼の葬式で泣いていたの見て、初めて分かつたんだ、彼はもういなひんだつてね。」

「どんな気持ちだつた、その時は。」

「良くある表現だけど、こころにぽつかりと穴が空いた氣分だつた。そこから何かが漏れて、何かが乱暴に入つてきた。」

「それつて具体的にはどんな氣分なの?」

「えーと、そうだなあ。夢から急に覚めた氣分つて言つたら分かるかな。」

「うーん、なんとなく。」

「僕は自分が何者で、何をしなければならないか分からなかつた。実際、その頃の記憶はなんか、曖昧なんだ。」

「そう、で彼女はどうなつたの?」娘は僕の事には興味が無いようだつた。

「彼女も僕と同じ気分だつたんじゃないかな。だから、僕と付き合ってくれたんだと思う。」

「彼との思い出を共有するためになに？」

僕は驚いて娘を見た。僕の言いたい事が娘には分かっているようだつた。なんだか、一生分驚いたような気がした。

行動してた。今、思うとおかしいんだけど、あの頃はそんな事全然思わなかつたな。僕らは、今ではなく、過去の中を生きていたんだ。まだ小学生だつてのにね。」

「でも、そんな事上手く行くはずが無いわ。」

「そう、僕らは彼が死んだ後、実際は一人だけなんだけど、いつも三人でいるみたい」「その通り。僕も、彼女も、すぐに気付く。このままじゃいけないってね。そしてその時は意外にもすぐにやつてきた。」

「彼女が消えちゃつたのね。」

「良く分かつたな。」と言いながら、僕は薄気味悪いものを感じた。僕は話してるんじゃない。ある結末に誘導されているような気がした。話すよう仕向けられているのだ。

「彼女は転校したよ。小学三年生の時だつたかな。僕は見送りにはいかなかつた。」

「どうして、付き合つてたんでしょう？」

「僕らは、二人とも、ある程度分かつてたんだと思う。このままではいられないってね。だからお互い別れる時は無関心だつたんだ。まあ、小学生の話だから、他の子に気が移っちゃつただけかもしらないけどね。」僕は笑おうとしたが、笑えなかつた。娘も笑わなかつた。

「ああ、この話はおしまい。もう寝よう。」と僕は言つたが、その声は娘には届いていないようだつた。

娘は難しい顔をして、何かを考えているようだつた。娘の見つめている先には、濃い暗闇があつた。テーブルのホットミルクはもう冷めていて、湯気は出ていなかつた。

「ああ、もう寝よう。」と言つて、娘の背中を叩くと、彼女はようやく立ち上がり、リビングを出て自分の部屋に行こうとした。でも、急に立ち止まつた。

「どうした?」僕が声をかけると、娘はこちらを振り返つて言つた。

「もし、その話が本当なら・・・」娘がこんな事を言い出すのは初めてだつた。この話は嘘の話を本当の話のように聞くという遊びだ。娘もその事は分かつてゐるはずだつた。僕は娘の小さな唇を見つめていた。

「悲しいわね。だつてパパの愛が彼女を捉えた事はなかつたんだもんね。彼女の愛は常に死者に注がれていた。」

おい、よせよ、この話は冗談だぜ。そう言おうとしたが、喉が凍りついたように、動かなかつた。

娘は僕の顔をじつと見て、闇にすりつと消えていった。僕は初めて娘を恐ろしいと感じていた。

幸いな事に明日は日曜日だ。朝からずっと、娘と二人きりだ。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。  
感想を頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6335f/>

---

二つの夜

2010年10月9日18時33分発行